

十日の菊

永井荷風

青空文庫

庭の山茶花さざんかも散りかけた頃である。震災後家を挙げて阪地に去られた小山内君おさないがぷらとん社の主人を伴い、俱ともに上京してわたしの家を訪おとねられた。両君の来意は近年徒いたずらに拙せつを養うにのみ力つとめているわたしを激励して、小説に筆を執らしめんとするにあつたらしい。

わたしは古机のひきだしに久しく二、三の草稿を蔵していた。しかしいずれも凡作見るに堪たえざる事を知つて、稿半こなかばにして筆を投じた反古ほごに過ぎない。この反古を取出して今更漉すきかえ返しの草稿

をつくるはわたしの甚はなはだ忍びない所である。さりとして旧友の好意を無にするは更に一層忍びがたしとする所である。

窮余の一策は辛うじて案じ出された。わたしは何故久しく筐きよう

底ていの旧稿に筆をつぐ事ができなかつたかを縷陳るちんして、纔わずかに一時

の責せめ、ふさを塞ぐこととした。題して『十日の菊』となしたのは、災後

重ちようよう陽を過ぎて旧友の来訪に接した喜びを寓するものと解せら

れたならば幸である。自ら未成の旧稿について饒じようぜつ舌ぜつする事の

甚しく時流おくに後れたるが故となすも、また何の妨さまたげがあろう。

まだ築地本願寺側の 僑居きようきよにあつた時、わたしは大に奮勵して長篇の小説に筆をつけたことがあつた。その題も『黄昏』と命じて、発端およそ百枚ばかり書いたのであるが、それぎり筆を投じて草稿を机の抽斗ひきだしに突き込んでしまった。その後現在の家に移居してもう四、五年になる。その間に抽斗の草稿は一枚二枚と剥ぎ裂かれて、煙管キセルの脂やにを拭う紙捻こよりになつたり、ランプの油壺やホヤを拭う反古紙になつたりして、百枚ほどの草稿は今既に幾枚をも余さなくなつた。風雨一過するごとに電燈の消えてしまう今の世に旧時代の行燈あんどうとランプとは、家に必須ひつすの具たることをわたしはここに一言して置こう。

わたしは何故百枚ほどの草稿を棄ててしまつたかというに、そ

れはいよいよ本題に進入はいるに當つて、まず作中の主人公となすべき婦人の性格を描写しようとして、わたしは遽にわかにわが觀察のなお熟していなかつた事を知つたからである。わたしは主人公とすべき或婦人が米国の大学を卒業して日本に歸つた後、女流の文学者と交際し神田青年會館に開かれる或婦人雜誌主催の文芸講演会に臨のぞみ一いちじょう場の演説をなす一段に至つて、筆を擱おいて歎息した。

初めわたしはさして苦しまずに、女主人公の老父がその愛嬢の歸朝を待つ胸中を描き得たのは、維新前後に人と為つた人物の性行については、とにかく自分だけでは安心のつく程度まで了解し得るところがあつたからである。これに反して当時のいわゆる新しい女の性格感情については、どことなく霧中に物を見るような

気がしてならなかつた。わたしは小説たる事を口実として、観察の不備を補うに空想を以てする事の制作上甚危険はなはだである事を知っている。それがため適当なるモデルを得るの日まで、この制作を中止しようと思ひ定めた。

わたしはいかなる断篇たりともその稿を脱すれば、必亡友井上かならず唾々子えあを招き、拙稿を朗読して子の批評を聴くことにしていた。

これはわたしがまだ文壇に出ない時分からの習慣である。

唾々子は弱冠の頃式亭しきてい三馬さんばの作と斎藤さいとう緑雨りよくうの文とを愛読

し、他日二家にも劣らざる諷刺家たらんことを期していた人で、他人の文を見てその病弊を指してきするには頗る妙を得ていた。一いちよ

葉女史うの『たけくらべ』には「ぞかし」という語が幾個あるか

と数え出した事もあれば、紅葉山人の諸作の中より同一の警句の再三重用せられているものを捜し出した事もあった。唾々子の眼より見て当時の文壇第一の悪文家は国木田独歩であつた。

その年雪が降り出した或日の晩方から電車の運転手が同盟罷工を企てた事があつた。尤わたしは終日外へ出なかつたのでその事を知らなかつたが、築地の路地裏にそろそろ芸者の車の出入しかける頃、突然唾々子が来訪して、蠣殻町の勤先からやむをえず雪中歩いて来た始末を語つた。その頃唾々子は毎夕新聞社の校正係長になつていたのである。

「この間の小説はもう出来上つたか。」と唾々子はわたしに導かれて、電車通の鰻屋宮川へ行く途すがらわたしに問いかけた。

「いや、あの小説は駄目だ。文学なんぞやる今の新しい女はとて
も僕には描けない。何だか作りものみたような気がして、どうも
人物が活躍しない。」

宮川の二階へ上つて、裏窓の障しょうじ子を開けると雪のつもった鄰
の植木屋の庭が見える一室に坐るが否や、わたしは縷るる々として制
作の苦心を語りはじめた。唾つば々子は時々長い頤あごをしやくりながら、
空すきつばら腹ひっかに五、六杯引掛けたので、忽たちまち微びく醺んを催した様子で、

「女の文学者のやる演説なんぞ、わざわざ聴きに行かないでも大
抵様子はわかつているじゃないか。講釈師見て来たような虚言うそを
つき。そこが芸術の芸術たる所以ゆえんだろう。」

「それでも一度は実地の所を見て置かないと、どうも安心が出来

ないんだ。一体、小説なんぞ書こうという女はどんな着物を着ているんだか、ちよつと見当がつかない。まさか誰も彼もまがいの大嶋と限ったわけでもなからうからね。」

「僕にも近頃流行るまがいの物の名前はわからない。贗物には大正とか改良とかいう形容詞をつけて置けばいいんだろう。」と唾々子は常に杯を放なさない。

「ああいう人たちはく下駄は大抵籐表の駒下駄か知ら。後がへつて郡部の赤土が附着いていないといけまいね。鼻緒のゆるんでいるところへ、十文位の大きな足をぐつと突込んで、いやに裾をぱつぱつとさせて外輪に歩くんだね。」

「それから、君、イトエの発音がちがっていなくツちやいけな

ぜ。電車の中で小説を読んでいるような女の話を書いて見たまえ。まず十中の九は田舎者だよ。」

「僕は近頃東京の言葉はだんだん時勢に適しなくなつて来るような心持がするんだ。普通選挙だの労働問題だの、いわゆる時事に関する論議は、田舎訛なまりがないとどうも釣合がわるい。垢抜あかぬけのした東京の言葉じゃ内閣弾劾だんがいの演説も出来まいじゃないか。」

「そうとも。演説ばかりじゃない。文学も同じことだな。気分だの気持だのと何処の国の託だかわからない言葉を使わなくつちや新しく聞えないからね。」

唾々子つづこはかつて硯友社けんゆうしゃ諸家の文章の疵累しるいを指したように、当世人の好んで使用する流行語について、例えば発展、共鳴、節

約・裏切る、宣伝というが如き、その出所の多くは西洋語の翻訳に基くものにして、吾人の耳ごしんに甚快はなはだよからぬ響を伝うるものを列挙しはじめた。

「そういう妙な言葉は大抵東京にいる田舎者のこしらえた言葉だ。そういう言葉が流行するのは、昔から使い馴れた言葉のある事を知らない人間が多くなった結果だね。この頃の若い女はざつと雨が降ってくるのを見ても、あらしもよいの天気だとは言わない。低気圧だとか、暴風雨だとか言うよ。道をきくと、車夫のくせに、四辻の事を十字街だの、それから約一丁先だのと言うよ。ちよいと向の御稻荷おいなりさまなんていう事は知らないんだ。御話にやならぬい。大工や植木屋で、仕事をしたことを全部完成ですと言った奴

があるよ。ぜにかんじょう 銭勘定は会計、受取は請求というのだったな。」
 啞々子の戯たわむるるが如く、わたしはやがて女中に会計なるものを
 命じて、俱ともに陶然として鰻屋の二階を下りると、晩景から電車の
 通らない築地の街は、見渡すかぎり真白まっしろで、二人のさしかざす
 唐傘からかさに雪のさらさらと響く音が耳につくほど静であった。わた
 しは一晚泊って行くように勧めたが、平素健脚を誇っている啞々
 子は「なに。」と言って、酔に乗じて本郷の家に帰るべく雪を踏
 んで築地橋の方へと歩いて行った。

同じ年の五月に、わたしがその年から数えて七年ほど前に書いた『三柏葉樹頭夜嵐』みつかしわこずえのよあらしという拙劣なる脚本が、偶然帝国劇場女優劇の二の替にかわりに演ぜられた。わたしが帝国劇場の楽屋に出入したのはこの時が始めてである。座附ざつき女優諸嬢の妖艶なる湯上り姿を見るの機を得たのもこの時を以て始めとする。但し帝国劇場はこの時既に興行十年の星霜を經ていた。

わたしはこの劇場のなおいまだ竣しゅんせい成せいせられなかつた時、恐らくは当時『三田文学』を編へん輯しゅうしていた故であろう。文壇の諸先輩と共に帝国ホテルに開かれた劇場の晩餐会に招飲せられたことがあつた。尋つひでその舞台開ぶたいびらきの夕ゆうにも招待を受くるの榮えいに接したのであつたが、編陋へんろう甚しきわが一家の趣味は、わたしをし

てその後十年の間この劇場の観かん棚ぼうに坐することを躊ちゆう躇うちよせし

めたのである。その何がためなるやは今日これを言う必要がない。

今日ここに言うべき必要あるは、そのかつて劇場に來きたり看みる事

の何故に罕まれであつたかという事よりも、今遽にわかに來り看る事の何故

頻繁になつたかにあるであらう。拙作『三柏葉樹頭夜嵐』の舞台

に登るに先立つて、その稽古の楽屋に行われた時から、わたしは

連れん宵しやう 帝国劇場に足を運んだのみならず、折々女優を附近の力

ツフエーに招き迎えシャンパンの盃さかずきを挙げた。ここにおいて飛ひち

耳よう長もく目の徒は忽ちわが身边を揣摩しまして艶つや事ごとあるものとなした。

巴里パリ輸入の絵葉書に見るが如き書割裏の情事の、果してわが身

辺に起り得たか否かは、これまたここに語る必要があるまい。わ

たしの敢えて語らんと欲するのは、帝国劇場の女優を中介にして、わたしは聊現代の空氣に触れようと冀つたことである。久しく藺そのはちいつちゆうぶし
八一 中節の如き古曲をのみ喜び聴いていたわたしは、編へんき
狭ようなる自家の旧趣味を棄てて後おくれ走ばせながら時代の新俚謡しんりように
耳を傾けようと思つたのである。わたしは果してわたしの望むが
如くに、唐棧とうざん縞じまの旧衣を脱して結城紬ゆうきつむぎの新様しんように追隨する事
ができたであろうか。

現代思潮の変遷はその迅速なること奔ほん流りゆうもただならぬ。
旦あしたに見て斬新となすもの夕ゆうべには既に陳腐となつている。槿花きんかの榮えい、
秋しゅう扇せんの嘆たん、今は決して宮詩をつくる詩人の間文字かんもじではない。

わたしは既に帝国劇場の開かれてより十星霜を経たことを言った。

今日この劇場内外の空氣の果して時代の趨勢を觀察するに足るものであつたか否か。これまた各自の見るところに任すより外はない。

わたしは筆を中途に捨てたわが長編小説中のモデルを、しばしば帝国劇場に演ぜられた西洋オペラまたはコンセールの聴衆の中にもと索めようとつと力めた。また有樂座に開演せられる翻訳劇の觀客に対しては特に精細なる注意をなした。わたしはようや漸くにして現代の婦人の操履そうりについてやや知る事を得たような心持になつた。それと共にわたしはいよいよわが制作の困難なることを知つたのである。およそ藝術の制作には觀察と同情が必要である。描かんとする人物に対して、著作者の同情深厚ならざるときはその制作は必

ず潤うるおいなき諷刺に墮おち、小説中の人物は、唯作者の提供する問題の傀儡かいらいたるに畢おわるのである。わたしの新しき女を見て纔わずかに興を催し得たのは、自家の辛辣しんらつなる観察を娛たのしむに止とどまらぬ、到底その上に出づるものではない。内心より同情を催す事は不可能であつた。わたしの眼底には既に動しがたき定見がある。定見とは伝習の道德観と並に審美観とである。これを破却するは曠世こうせいの天才にして初めて為し得るのである。

わたしの眼に映じた新らしき女の生活は、あたかも婦人雑誌の表紙に見る石版摺せきばんずりの彩色画ほとんどと殆ほとんど撰せんぶるところなきものであつた。新しき女の持つてゐる情緒は、夜店の賑にぎわう郊外の新開町に立つて苦学生の弹奏して錢を乞うヴァイオリンの唱歌を聞くに等しきも

のであつた。

こはるじへえ

小春治兵衛の情事を語るに最も適したものは大阪の浄瑠璃であ

うらざとときじろう

る。浦里時次郎の艶事を伝うるに最適したものは江戸の浄瑠璃

もつとも

かならずタリア

である。マスカニの歌劇は必伊太利亚語を以て為されなければな

るまい。

然らば当今の女子、その身には窓掛に見るような染模様の羽織

だいとくずきん

かぶ

を引掛け、髪は大黒頭巾を冠つたような耳隠しの束髪に結い、

ゆでだこ

手には茄章魚をぶらさげたようなハンドバッグを携え歩む姿を写

さながら

し来つて、宛然生けるが如くならしむるものはけだしそのモデ

とも

ルと時代を同じくし感情を俱にする作家でなければならぬ。

江戸時代にあつて、ためながしゆんすい

為

永春水その年五十を越えて『梅見の

船』を脱稿し、柳亭種彦りゆうていしねひこ六十に至つてなお『田舎源氏』の艶史を作るに倦うまなかつたのは、啻ただにその文辞の才能よくこれをなさしめたばかりではなからう。

四

築地本願寺畔の僑きやうきよ居きに稿を起したわたしの長篇小説はかくの如くして、遂に煙管キセルの脂やにを拭ぬう反古ほごとなるより外、何の用をもなさぬものとなつた。

しかしわたしはこれがために幾多いくたの日子にっしと紙料とを徒費したことを悔くいていない。わたしは平生へいぜい生せい草稿をつくるに必ず石州製の

生紙きがみを選んで用いている。西洋紙にあらざるわたしの草稿は、反古となせば家の塵ちりを掃はらうはたきを作るによろしく、揉もみ柔やわらかわやに持ち行けば浅草紙あさくさがみにまさること数等である。ここに至つて反古の有用、間文字かんもじを羅列したる草稿の比ではない。

わたしは平生文学を志すものに向つて西洋紙と万年筆とを用うること莫なれと説くのは、廢物利用の法を知らしむる老婆心に他ならぬのである。

往時、劇場の作者部屋にあつては、始めて狂言作者の事務を見習わんとするものあれば、古参の作者は書拔の書き方を教ゆるに先だつて、まず見習をして觀世かんぜ捻よりをよらしめた。拍子木ひょうしぎの打方うちかたを教うるが如きはその後のことである。わたしはこれを陋ろうしゆ

習うとなして嘲あざけつた事もあつたが、今にして思えばこれ当然の順序といふべきである。観世捨をよる事を知らざれば紙を綴とずることができない。紙を綴とることを知らざれば書拔を書くも用をなさぬわけである。事をなすに當つて設備の道を講ずるは毫ごうも怪しむに當らない。或人の話に現時操觚そうこを業となすものにして、その草稿に日本紙を用うるは生田葵山子いくたきざんとわたしとの二人のみだという。亡友唾あ々子もまたかつて万年筆を手にしたことがなかつた。

千朶せんだ山房さんぼうの草稿もその晩年『明星』に寄せられたものを見るに無罫むけいの半紙はんしに毛筆をもつて楷行を交えたる書体、清勁せいけい暢達ちやうたつ、直にその文を思わしむるものがあつた。

わたしはしばしば家を移したが、その度ごとに梔くちなし子一株を携

え運んで庭に植える。甕ただに花を賞するがためばかりではない。その実を採つて、わたしは草稿の罫紙けいしを摺する顔料となすからである。梔子の実の赤く熟して裂け破れんとする時はその年の冬も至日しじつに近い時節になるのである。傾きやすき冬日の庭に罫ねぐらを急ぐ小禽こどりの声を聞きつつ梔子の実を摘つみ、寒夜孤燈の下に凍ゆる手先あぶを焙りながら破れた土鍋どなべにこれを煮る時のいいがたき情趣は、その汁を絞つて摺つた原稿罫紙に筆を執る時の心に比して遙に清絶である。一は全く無心の間事かんじである。一は雕ちようちゆう虫の苦、推敲すいこうの難、しばしば人をして長ちようたいそく大息を漏らさしむるが故である。

今秋不思議にも災禍まぬかを免れたわが家やの庭に冬は早くも音ずれた。筆を擱おいてたまたま窓外を見れば半庭の斜陽に、熟したる梔子もゆ燃

るが如く、人の来って摘むのを待っている……。

大正十二年癸亥きが十一月稿

青空文庫情報

底本：「荷風随筆集（下）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年11月17日第1刷発行

2007（平成19）年7月13日第23刷発行

底本の親本：「荷風随筆 一〜五」岩波書店

1981（昭和56）年11月～1982（昭和57）年3月

※底本はこの作品で「門〈日」と「門〈月」を使い分けており、「間文字」と「間事」では、「門〈月」を用いています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十日の菊

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>